

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：23301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24531149

研究課題名(和文) ライフストーリーインタビューによる美術科教員の長期的な職業適応プロセスの解明

研究課題名(英文) Long-term career adaptation process for art teacher

## 研究代表者

荷方 邦夫 (NIKATA, Kunio)

金沢美術工芸大学・美術工芸学部・准教授

研究者番号：40347357

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：学校教員の職業適応は、教員のキャリア支援とキャリアの安定した形成に重要である。これを検討するために、美術を専門とする教員を対象とした職業適応について、調査研究が実施された。

結果として美術科教員に特有のものとしては、芸術家・作家としての活動、アイデンティティが充足していると感じられる場合、満足と適応の状況が向上することが示唆された。これらの結果は学会発表(荷方, 2012, 2014)がなされたほか、原著論文(木内・島田, 2012; 荷方, 2015)として発表が行われた。

研究成果の概要(英文)： Professional adaptation of school teachers, is important to the stable formation of career support and careers of teachers. To study this, professional adaptation intended for teachers who specialize in art, research has been carried out.

As a result, specific to the art and science teachers as the activities as an artist, if the identity is felt to be satisfied, that satisfaction with the adaptation of the situation can be improved has been suggested. These results conference presentations (Nikata, 2012 and 2014; Shimada, Kiuchi, 2012) In addition to that has been made, original articles (Kiuchi and Shimada, 2012; Nikata, 2015).

研究分野：認知心理学・教育心理学

キーワード：職業適応 美術教育 ライフストーリー・インタビュー 質的研究

研究成果の概要(和文):

### 1. 研究開始当初の背景

教員の指導力向上が叫ばれる中、様々な施策が検討、実施されている。その具体的な方策は、大きく2つに分類できる。一つは、大学における教員養成に関するもので、大学教職課程および教職大学院が該当する。もう一つは、教員採用後に関するもので、免許状更新講習や各種講習が該当する。従来、前者についての研究は多いが、後者についての研究は少ない。本研究は、後者の教員採用後の教師教育研究に位置づけられる。

教員採用後の教師教育に関する研究が少ない理由の一つに、研究手法の問題がある。従来から行われていたアンケート形式は、短期的で横断的な調査に向いている。しかし、教員採用後の教師教育は、10年単位の大きなスパンで考える必要があり、従来の手法を適用できないという問題点があった。

そこで本研究は、近年知見が集積されつつある、長期的スパンの解析に向いている質的心理学的手法を用いて、教員採用後の職業適応のプロセスを解明することを目的とした。これらは、半構造化面接などによる語り(インタビューなどの手法を用いることで、従来の問題であったアンケート調査の欠点を補い、長期的な職業適応プロセスの解明が期待できると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、中学校、高等学校の美術科教員を対象として、5~20年程度の長期的な職業適応プロセスの解明を目的とする。研究ではライフヒストリーインタビューを行い、質的心理学的手法の枠組みで分析を行うことと

した。教員の指導力向上が叫ばれる中、従来のアンケート形式の調査では解明できなかった長期的な職業適応プロセスを明らかにし、長期的視点からの教員養成を効率的かつ有効に行うための基礎的知見を提供することが研究の主たる目的である。

また関連研究として、教職の志望意識に関する質的研究を実施した。学生の教職志望意識には、教職科目と臨床経験科目の個々の役割に加えて、それらの相互作用が影響していると考えられる。そこで本研究は、教職科目と臨床経験科目が教職志望意識に与える影響を検討した。

#### 学術的な特色

本研究の学術的な特色は、次の2点である。

#### (1) 美術科教員を対象とすること

美術科教員に着目し、美術科特有の事情を含めた適応プロセスを明らかにしようとしていることは、本研究の特色である。美術科のみを対象とするため、一般化の範囲は限定されるが、他教科への波及効果を念頭において研究を進める。

#### (2) 質的心理学的手法を利用すること

質的心理学的手法を利用することは、本研究の特色である。これにより、これまでアプローチできなかった長期的な職業適応プロセスを明らかにすることが可能となる。特に関連研究では、線径路・等至性モデル(TEM)を使った検討を行い、時系列データの分析をより精緻に行う方法についてあわせて検討をおこなった。

#### 独創的な点

本研究の独創的な点は、「教科の専門性」と「基礎的指導技術」の長期的な融合プロセスに着目することである。

また教科の専門性と基礎的指導技術の融合は、教員養成にとって重要である。それは大学における教員養成課程ではなく、現場経験によって醸成されると考えられる。本研究はこの点にアプローチするという意味で独創的である。

### 3. 研究の方法

研究1 美術科教員のライフストーリー・インタビューによる職業適応（荷方）

(1) 調査参加者：11名の美術科・図工専科教員が調査に参加した。本研究では、美術系大学の出身者との違いについて質問を行うため、1名についてのみ教育学部出身の教員にインタビューを行った。

(2) 調査方法：調査はライフストーリー・インタビューの手法を用いた半構造化面接を行い、調査者が参加者に対して用意した質問項目に自由に回答する形で行われた。

(3) 質問項目：質問項目は主として(1)教職を志望した動機やエピソード (2)美術家教員としての現在の仕事内容、やりがい、ポリシーである (Table 2)。また、参考となるエピソードとして大学時代の学生生活、美術系学部から教員になったことについての所感などを聴取している。

研究2 教員養成課程における臨床経験科目が教職志望意識に与える影響：半構造化面接と時系列的分析による検討（島田）

(1) 調査参加者：本学部の4年生9名(男性1名、女性8名、平均21.7歳)の協力を得た。

(2) 調査方法：半構造化面接による調査を行った。面接では、大学4年間を入学時から4年生夏まで半期ごとに区切り、入学時から順番に、当該時点での教職志望意識の評定。教職科目と臨床経験科目での体験内容とその感想を尋ねた。手続きとしてはまず、入学時と1

年次夏休み終了時での教職志望意識を、「絶対教師になりたくない」を1、「絶対教師になりたい」を10点として、参加者に評定してもらった。面接者は2つの時点での評定を比較し、評定が上昇、あるいは低下、不変の理由を参加者に聞いた。

次に、1年生春休み終了時の教職志望意識について評定をしてもらった。面接者はひとつ前の時点である1年生夏休み終了時の評定と比較し、評定が上昇、あるいは低下、不変の理由を参加者に聞いた。

### 4. 研究成果

#### (1) 研究1

それぞれの質問項目について、各教員の回答の中で共通しているものを中心に分析を行った。

#### 教職を志望した動機やエピソード

最も言及された動機は、美術をやるのが好きだったこと。身の回りに強い影響を与える美術の教員がいたことである。特に教員になることによって、何らかの形で制作活動を続けられるという期待についても同時に言及された。これは先に指摘したような「生活の糧型」の志望理由が明らかに存在することを示している。

また、学生の中に、保育場面や教育場面で指導をする経験をしたことや、他者の前で振る舞う経験をしたことなども言及があった。

大学時では、教育実習など教職に関する直接的な経験の中で、次第に教職に携わることへの興味・関心が増えていた。この意味で、美術系大学出身の学生は、必ずしも早期決定型のキャリア形成を行うとは限らず、自らの美術に関する活動や評価の中で、次第に教員としてのキャリア形成を進めていくものと考察された。

ライフストーリーのポジティブ、ネガティ

イベントに関する分析。

それぞれのライフストーリーの中で、各教員が言及したイベントについて、それがポジティブなイベントであるか、ないしはネガティブなイベントであるかという観点からそれぞれ抽出された。

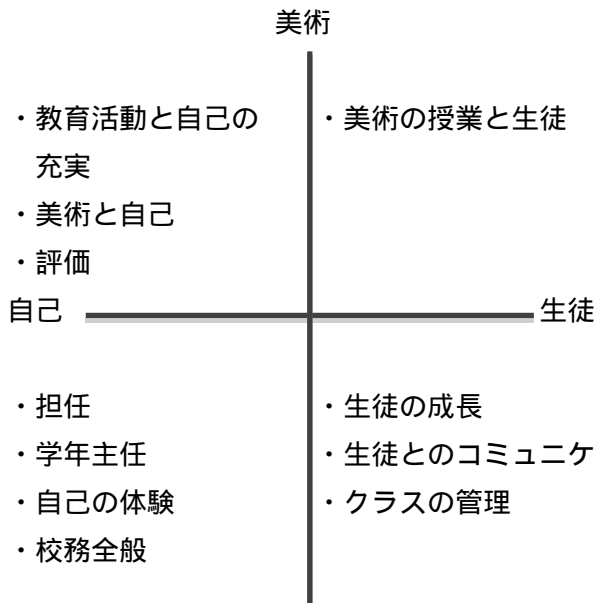


Fig.1 調査で抽出された  
教員のポジティブ・ネガティブイベント

それぞれの分類されたイベントについては、美術に関連するイベントと美術に直接関連しない一般的なイベントに関わる軸（第1軸）。生徒に関連するイベントと生徒にかかわらない学校の業務や教育全体、あるいは教員自身に関わる軸（第2軸）を考慮することによって、よりイベントのカテゴリーが構造的に表現できると思われ、これに従って分類を行うこととした。

ポジティブイベントについて、最も多かったのは生徒に関わることによって生まれるポジティブな経験である。

また、教員としての自己の生活や仕事、美術との関わりなどについてもポジティブな経験が言及された。美術に関連する事項につ

いてはこれまで長い間関係を持ち続けてきた美術に関わる仕事ができる点ことは、教員として生きる上で重要であると考えられている。

また、教員としての自己の成長、教育活動の様々な場面における経験も大きく寄与している。

ネガティブイベントについても、概ね同様のカテゴリーで検討が可能であった。生徒に関するネガティブイベントは、生徒との関係、コミュニケーションに関するものがほとんどであった。また、美術の授業に関しても、多くの問題が指摘された。

自己に関わるネガティブイベントとしては、やはり教育現場の多忙や業務の増加に関する指摘が多くなされた

その他、芸術表現としての生徒の活動をどのように評価するか、その考え方や方法についても多くが課題を感じていること。教員相互のコミュニケーションに関する問題も比較的多くの言及が見られた。

## (2) 研究2

本研究は、教職志望動機の変化とその背景にある体験についてインタビュー調査を行い、TEMにより分析した。その結果「臨床経験科目への動機づけ」、「臨床経験科目における体験の肯定的な認知」、「教職に対する自己効力感」の好循環を支援することが、教職志望意識の向上に役立つことを示した。また、その好循環は、教職科目と臨床経験科目における支援によって達成できることを提案した。

その中で、教職志望意識に関係するのは体験に対する認知であると考えられる。志望者は、ポジティブな体験だけでなく、ネガティブな体験をした中でも、その経験を客観的・肯定的に認知することによって、教職志望意

識の向上につなげることができたのだと考察された。

本研究では、TEM モデルをつかった仮説生成的な手法で質的な語りの分析を試みた。分析の客観性や、時系列データを回想的な方法で収集することの問題点も指摘することはできるが、ライフヒストリーを時系列にあわせて構造化するという点において、本分析方法は有効かつ实际的であると結論づけることができる。その中で、教職志望意識に関係するのは体験に対する認知であると考えられる。志望者は、ポジティブな体験だけでなく、ネガティブな体験をした中でも、その経験を客観的・肯定的に認知することによって、教職志望意識の向上につなげることができたのだと考察された。

本研究では、TEM モデルをつかった仮説生成的な手法で質的な語りの分析を試みた。分析の客観性や、時系列データを回想的な方法で収集することの問題点も指摘することはできるが、ライフヒストリーを時系列にあわせて構造化するという点において、本分析方法は有効かつ实际的であると結論づけることができる。

### (3) その他

研究の派生的なアウトプットとして、職務の魅力や満足に関する研究発表（荷方，2013a）の他，研究の知見の一部が書籍（荷方，2013b）に解説として公表された。

また，本研究を含む研究発表の場として，美術科教員，美術の教育実践を活性化するためのシンポジウムを 2015 年に開催し，一般の参加者を中心として多くの人に研究成果の発表を行った。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 2 件)

荷方邦夫 (2015) 美術科教員の職業適応プロセス ~ ライフヒストリー・インタビューにもとづく質的検討 ~ 金沢美術工芸大学紀要 59,105-114.

木内美恵子・島田英昭 (2012) 教員養成課程における臨床経験科目が教職志望意識に与える影響 : 半構造化面接と時系列的分析による検討 信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究 13,31-40.

〔学会発表〕(計 3 件)

荷方邦夫 (2014) 美術科教員の職業適応 (2) 若手教員のポジティブ・ネガティブ分析 日本教育心理学会第 56 回総会 2014 年 11 月 7 日~9 日 神戸国際会議場

島田英昭・木内美恵子 (2013) 教員養成課程における実習系科目が教職志望意識に与える影響 -半構造化面接と時系列的分析による検討- 日本心理学会第 76 回大会 2012 年 9 月 11 日~13 日 専修大学

田中良史・永井由佳里・荷方邦夫・田浦俊春・小橋康章 (2013) 拡大するデザイン研究-認知デザイン論に向かって 日本認知科学会第 30 回大会 2013 年 9 月 12 日 玉川大学

荷方邦夫 (2012) 美術科教員の職業適応 ライフヒストリー・インタビューにもとづく予備的検討 日本教育心理学会第 56 回総会 2012 年 11 月 23 日~25 日 琉球大学

〔図書〕(計 1 件)

荷方邦夫 (2013) 心を動かすデザインの秘密 実務教育出版

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

研究公開事業 (1 件)

「カナビ x ムサビ とことん語ろう アートの授業 ~ ビダイが考える美術教育の可能性 ~」

2015 年 1 月 24 日 石川県金沢市 金沢美術工芸大学にて開催

発表者 荷方邦夫 (金沢美術工芸大学)

三沢一実 (武蔵野美術大学)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

荷方邦夫 (NIKATA KUNIO)

金沢美術工芸大学 美術工芸学部・准教授

研究者番号：40347357

(2)研究分担者

島田英昭 (SHIMADA HIDEAKI)

信州大学 教育学部 准教授

研究者番号：20467195